

吃音（どもっている）かなと思ったら
—幼稚園・保育園の先生へ—



吃音って？

以下の3つの症状（吃音の中核症状と呼びます）が多く見られると「吃音」の可能性が高いです

- | | |
|---------------|--------------------------------|
| ことばの一部を繰り返す | 「おねおねえちゃん」「 <u>な</u> ななななつやすみ」 |
| 音を引き伸ばす | 「よーんかい」「s-しんぶん」 |
| ことばが出ない（ブロック） | 「...ちから」 |

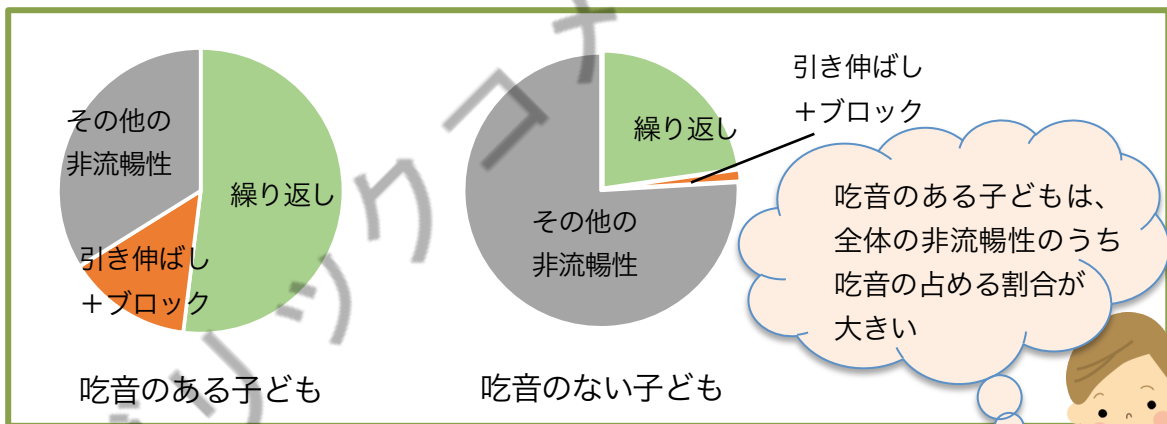
*s-は、「し」の子音部分の音が長く伸びていることを示す

以下の「その他の非流暢性*1」も子どもによく見られますが、これらが多いだけでは吃音とは判断しません

*1 なめらかさを「流暢性」と言います。「非流暢性」＝なめらかではないことです

- | | |
|-----------|-----------------------------------|
| ・ 語句の繰り返し | 「これは これは」「 <u>と</u> けい とけい とけいがね」 |
| ・ 挿入 | 「えっとね あのね それでね ぼくがね」 |
| ・ 言い直し／中止 | 「じ... とけいが」（「じかん」と言おうとしていた？） |

話すときに、手足を動かしたり、頭を振ったり、まばたきをしたり、話す前に大きく息を吸ったり、などの動きが見られる場合もあります。これは、ことばが出にくいときに、何とか出そうとして自然と身につくその子なりの工夫であり（無意識の場合もあります）、吃音の症状の一部のことがあります。（話すのとは関係なく体がピクッと動くのは、吃音の随伴症状ではありません。チックかもしれません。）



非流暢性のタイプの割合 (Yairi & Ambrose, 2005)

吃音という判断は？

- ・ その他の非流暢性ばかり → **吃音ではなさそう**
- ・ 非流暢性のうち吃音の3症状が占める割合が大きい → **吃音かも**
- ・ 吃音の症状が頻繁に（100文節*2話したとき3つ以上）出てくる → **吃音かも**
- ・ くり返しの数（回数）が1～2回だけ（例：「アアイス」） → **吃音ではなさそう**
3以上（例：「アアアアイス」） → **吃音かも**

*2 文節の数え方：「ぼく きょう ようちえんに いったよ」→ 4文節

吃音に関するさまざまな疑問

* ここからは便宜的に、非流暢になること、特に吃音らしい症状がみられることを、総称して「つっかえ」と呼びます

Q：どうして吃音になるの？

A：その子どもが元々持っている体質（ことばのつっかえやすさ）が原因の 7 割を占めると言われています。そこに、発達の時期（ことばの能力が急速に高まる時期）や環境（特別なものではなく、幼児期によくある、弟妹の出生、引越し、幼稚園入園など）の要因が加わって、吃音になったり、それが続いたりすると言われています。昔に言われていた「育て方の問題」は、現在否定されています。

Q：いつ頃、どのくらいの数の子が吃音になるの？

A：最も吃音が出やすいのは 2～3 歳と言われていて、幼児期の吃音の 95% は 4 歳までに始まると言われています。また、幼児期には 100 人のうち 5～10 人が吃音になると報告されています。専門的には症状が 6 ヶ月以上続く場合には、正常な言語発達の途中経過としてよく見られる非流暢性というより、吃音である可能性が高くなります。

Q：吃音になったら、その後どのようなようになっていくの？

A：研究によって数値に多少差がありますが、吃音が始まってから 2～3 年後には 6 割、最終的には幼児期のうちに、おおそ 7 割程度が治ると言われています。少数派ですが、吃音の頻度が増えたり、話し方が苦しうようになってきたり、悪くなる様子が見られる子どももいます。幼児期の吃音は変動が大きく、すっかり良くなったと思ってもぶり返すように見えることもありますし、その逆もありますので、一喜一憂せずに、3 ヶ月から半年単位の長い目で見ていく必要があります。

Q：どのようにかかわればいいのか？

A：原理としては「できるだけめらかに話せる場面を増やし、吃音の話し方が定着しづらくする」です。一般的に、大人のかかわり方で子どもが話しやすくなるとされているのは、以下の通りです。

- ① 周りの大人がゆっくり（ゆったり）話す（子どもに「ゆっくりでいいよ」と言うのではなく、大人自身がゆっくり話す）
- ② 周りの大人が簡単な文、ことばで話す
- ③ 目の前（現在）のことについて話す（過去について話すことは難しいので）
- ④ 質問を減らす（質問を控えめにして、子どもの話したいことに沿って会話をする）
- ⑤ 子供の気持ちが落ち着いている状態で話す（興奮しすぎると吃音が出やすくなる → 例：兄弟で競い合わず順番に話す）
- ⑥ 話し方のアドバイスはしない（「ゆっくりね」「おちついて」「深呼吸して」と伝えても、子どもが話し方をコントロールすることは難しいので）
- ⑦ 言い直しを要求しない（子どもにとって、話すことが楽しくなくなるので。あるいは「ダメな話し方をしたのかな」と思ってしまうこともあるので）

集団の中でのかかわり方

子どもと一对一の場合は、前述の「どのようにかかわればいいのか」で述べた原理（できるだけめらかに話せる状況を作る）に沿ったかかわり方が基本となります。では、幼稚園、保育園など他の子もいる集団の中ではどうでしょうか。以下、保育園、幼稚園の先生への調査から、「どうしたらよいかわからなかった」、「この対応でよかったのだろうか」と迷った」と報告があった状況について解説してみます。



吃音のある子の話し方に、他の園児が反応します。
真似したり、笑ったり。悪意はなく、先生に報告に来たり、どうして「あ、あ、あって言うの？」と質問される場合もあります。

保育園・幼稚園の先生を対象とした調査の回答の中には、「みんなとちょっと違うなという正直な気持ちに対し、「いけません」と頭ごなしに注意するのもおかしいし、説明の難しさを感じた」という先生の回答もありました。

まずは、子どもの疑問や反応に対しては先生にしっかり向き合って欲しいと思います。先生がきちんと答えることで、吃音のある子も、他の子も安心して生活できるようになります。

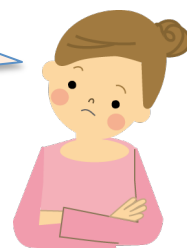
「わざとじゃないから笑わないでね（真似しないでね）」

「ときどき、あああってなることもあるけど、〇〇くんの話し方の癖だから、〇〇くんのお話をしっかり聞こうね」

などの対応で解決することが多いと思います。

吃音のある子どもへのかかわりに限らず、普段から「やさしい気持ちで人の話を聞くことの大切さを伝えています」という先生もいらっしゃいました。そのような先生のご指導が、吃音のある子にとっての話しやすい環境づくりとなり、吃音のない子との自然な共存につながると思います。

吃音のある子の話を、他の園児が聞き取れず、困った顔をしていたことがあります。そして私自身もしっかり聞こうとしていたのですが、聞き取れずにいると、子どもが悲しい顔になってしまうことがありました。



吃音のある子のお話をちゃんと聞こうとしているのに、聞き取れずに困っているお子さんがいたら、先生が中に入って会話をサポートしてあげてください。通訳をするのではなく、先生も一緒に会話に入り「〇〇くんは△△なんだね」などと、コメント風に話をまとめて返してあげると、聞き取れなかった子も理解しやすく、お話をした子も聞いてもらえたという満足感が得られると思います。

先生が聞き取れない場合、ゆっくり1つずつ内容を確認していくとよいかもしれません。「だれと?」「いつ?」「どこで?」など、短いことばで返せる質問ならば、子どもにとっても負担が少ないのでなめらかに話しやすいと思います。

ゆっくり確認する時間がない場合は、聞き取れたエッセンスだけを繰り返し、「〇〇くんがお話してくれたこと自体が嬉しいことだよ」というメッセージを伝えてください。「恐竜のことを話してくれたんだね。お話してくれてありがとうね」などでよいと思います。自分が話すという行為を認めてもらう経験は自信になります。

?



幼稚園での発表会、劇をするのですが、吃音のある子はセリフのない役にした方が良いでしょうでしょうか。

吃音のある大人の方から、「小さい頃セリフをもらえなかった」（それによって自分の話し方はダメなんだと思った）というエピソードを聞くことがあります。本人がセリフを言いたいと思っているのならば、その役を与えてチャレンジさせてあげてください。他の人と一緒に声を揃えて言ったり、歌を歌うときは吃音が出にくい傾向がありますので、お友達と一緒にセリフを言う役や、歌を歌う役もいいかもしれません。しかし、大人が勝手に決めるのではなく、どのような形でしたいかを子どもと相談して決めるのがよいと思います。

吃音のある子のお話を最後までしっかり聞こうとしているのですが、時間がかかるため、他の園児に呼ばれてしまいます。



「どのようにかかわればいいのか」で基本的なかわり方を記しましたが、お子さん同士の間で「順番に話す」「他の子が話す番の時は、しっかり聞く」というルールを作るとよいと思います。吃音のある子のお話には時間がかかるありますが、話しかけてきた時はできるだけしっかり聞いてあげてください。もちろん、他のお子さんが話している時に、吃音のある子が話しかけてきたときは「順番だから待ってね」と伝え、話が終わってから、しっかり聞いてあげてください。逆の場合も同様です。

子どもに「順番」がわかりやすくするために、おもちゃのマイクなどを使い、それを持っている子が話し、他の子は静かに聞く、というようなルールを作るとわかりやすいかもしれません。

保護者へのサポート

保護者にとって、自身の子どもを毎日みてくれている保育園・幼稚園の先生は、子どもに何かあった時に相談したい人の1人です。吃音についても、保育園・幼稚園の先生への調査から、多くの保護者が先生に相談をしていることが分かりました。以下、保護者へのサポートとしてどのようなことができるか、提案します。

1. 情報提供

保護者が「どうかかわったらよいのか」「相談に行った方がよいのか」「どこに相談すればよいのか」など、情報不足で困っている場合は、下記の内容を伝えてください。

① かかわり方

このパンフレットの「どのようにかかわればいいのか」p.3の情報を伝えてください

② 相談に行くべきか

以下の様子が見られたら、専門家への相談を勧めてください。

- ・ 吃音の状態が1年以上続いている。
- ・ その1年のうちに症状が悪化している
- ・ 話し方が苦しそうである
- ・ 子どもが話し方を気にしている
- ・ 小学校入学までの期間が1年未満である



③ どこに相談に行くか

吃音に関する支援は主に言語聴覚士が担当します。地域の保健センターや都道府県の言語聴覚士協会に問い合わせると、幼児の吃音の指導を行っている言語聴覚士のいる病院・施設・医院などを紹介してもらえます。担当診療科は、耳鼻咽喉科、小児科、リハビリテーション科など、施設によって異なります。

大学の教育学部には、言葉の問題の相談に応じてくれるクリニックや相談室があることがあります。また、地域の小学校の「ことばの教室」では、就学前相談を受け付けているところがあります。これらは特別支援を専門とする教員が主に担当しています。

2. 子どもについての共通理解

吃音は周りの環境によって、現れ方が違うことがありますので、保護者から家での様子を聞き、園での様子を保護者に伝え、子どもへのかかわり方を一緒に話しあえる体制を作っておくと、保護者も安心できると思います。専門家へ相談しているお子さんの場合は、保護者が専門家か



ら得た情報を先生も共有し、保育・教育場面に取り入れていただくと、子どもへの支援が倍増します。

<引用文献・参考文献>

1. Yairi, E., Ambrose, N. G. (2005) Early childhood stuttering: I. Persistency and recovery rates. Journal of Speech, Language, and Hearing Research, 42, 1097-1112.
2. ギター, B. (2007) 吃音の基礎と臨床: 統合的アプローチ. 東京, 学苑社, 2007. (英語版は2019年に第5版が出版されているが、日本語版は第3版の翻訳である。)

イラスト出典：イラストわんパグ (<http://www.wanpug.com>)



文責：発達性吃音の研究プロジェクトメンバー（酒井奈緒美）
国立障害者リハビリテーションセンター 研究所 感覚機能系障害研究部
〒359-8555
埼玉県所沢市並木 4-1
TEL：04-2995-3100
FAX：04-2995-3132
HP：http://www.rehab.go.jp/ri/kankaku/kankakuj.html
Web サイト URL
<https://plaza.umin.ac.jp/kitsuon-kenkyu/>（資料のダウンロードが可能です）

